

佐谷氏と歴史遺産 笠松城跡



佐谷氏は、常陸平氏の流れをくむ一族で、正元元年（1259）には佐谷実幹が佐谷郷（本郷、永井、大志戸、上佐谷、中佐谷、下佐谷、雪入、大峰、山本、今泉、小山崎、沢辺）の地頭職となり、周辺を治めました。中佐谷の笠松城（市指定文化財）は、その頃に築城されたものと考えられています。南東に突き出した丘陵の突端に立地し、南に天の川、北東に雪入川が流れ、城の南東端で合流する、防御に適した場所となっています。本丸跡には、現在でも土塁が一部残されており、当時の状況をうかがい知ることができます。

14世紀頃には小田氏からの侵攻により佐谷郷のうち本郷、永井、大志戸、今泉、小山崎、沢辺を失い、勢力が大幅に減衰したようです。その後の佐谷氏の動向については、明らかではありません。

かつて、佐谷氏の菩提寺として、笠松城の南西400mの台地上に普門寺という寺院がありました。明治時代初期に廃寺となりましたが、この際にいくつかの五輪塔が中佐谷字十王堂に移されました。このうちの1基に「大掾地経院 天道立石工□※」「□左衛門尉 天文九年二月□□」という銘文があります。この五輪塔は、佐谷郷に住んだ佐谷氏の一族により、祖先の佐谷左衛門尉（実幹）の供養のために天文9年（1540）に建立されたものと考えられています。佐谷氏に関する貴重な歴史遺産として、市指定文化財となっています。

※□は、判読不能な文字を表しています。